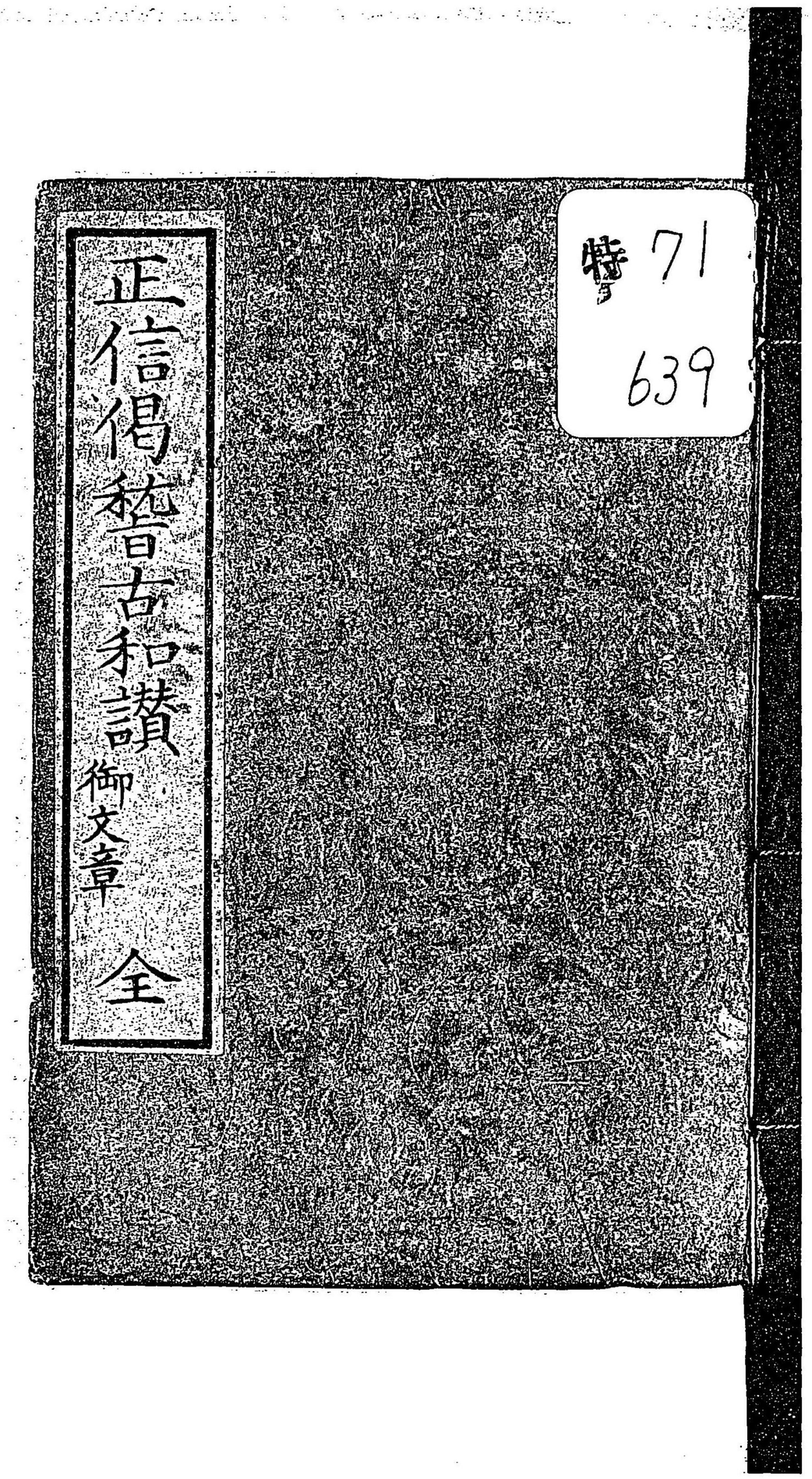


特71
639

300935-000-4

特71-639

正信偈稽古和讃（御文章）

求古堂

M19. 4

ABA-0034

特71
639

御文章

正信偈稱揚古和讃

東京 堂梓

52.6.2
77W20230

明治十九年五月二日印刷出版

歸命无量壽如來
南无不可思議光
法藏菩薩因位時
在世自在王佛所

覩見諸佛淨土因
國土人天之善惡
建立无上殊勝願
超發希有大弘誓

五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方
普放无量无邊光
无导无對光炎王

清淨歡喜智慧光
不斷難思无稱光
超日月光照塵刹
一切羣生蒙光照

本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃
必至滅度願成就

如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時羣生海
應信如來如實言

能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊廻入
如衆水入海一味

攝取心光常照護
已能雖破无明闇
貪愛瞋僧之雲霧
常覆真實信心天

譬如日光覆雲霧
雲霧之下明无闇
獲信見敬大慶喜
即横超截五惡趣

一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名分陀利華

彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯

印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機

釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有无見

宣說大乘无上法
證歡喜地生安樂
顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂

憶念弥陀佛本願
自然即時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩

天親菩薩造論說
歸命无碍光如來
依修多羅顯眞實
光闡横超
大誓願

廣由本願
力廻向
爲度羣生
彰一心
歸入功德
大寶海
必獲入
大
會衆數

得至蓮華藏世界
卽證眞如法性身
遊煩惱林現神通
入生死薗示應化

本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦

天親菩薩論註解
報土曰果願誓願
往還廻向由他力
正定之因唯信心

惑染凡夫信心發
證知生死即涅槃
必至无量光明土
諸有衆生皆普化

道綽決聖道難證
唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修
圓滿德號勸專稱

三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓
至安養界證妙果

善導獨明佛正意
矜哀定散与逆惡
光明名號顯曰緣
開入本願大智海

行者正受金剛心
慶喜一念相應後
与韋提等獲三忍
即證法性之常樂

源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立

極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲无倦常照我

本師源空明佛教
憐愍善惡凡夫人
眞宗教證興片州
選擇本願弘惡世

還來生死輪轉家
決以疑情爲所止
速入寂靜无爲樂
必以信心爲能入

弘經大士宗師等
拯濟无邊極濁悪
道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

●南无阿弥陀仏
●南无阿弥陀仏
●南无阿弥陀仏
●南无阿弥陀仏
●南无阿弥陀仏

一弥陀成佛のこのかたい
まゝ十劫をへたまへり
法身の光輪きわもなく
世の盲冥照らしたまふ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

智慧の光明えうおし

有量の諸相ことぐく

光曉かぶらぬものはなし

上

真實明に歸命せよ

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

重

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏三三三

南无阿弥陀仏三三三

南无阿弥陀仏三三三

南无阿引

解脱の光輪をなし

光觸かぶるものいみな

有无となるとのべたまふ

上平等覺より歸命せよ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

光雲无碍如虚空
一切の有碍ふさりぬし
光澤かぶらぬものそなた

上

難思議ゝ帰命せよ

三重

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

清浄光明ちゑびなし
遇斯光の因名形ましま
一切の業繫ものぞこりぬ
下
畢竟依を帰命せよ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

佛光照曜寂第一

光炎王佛とおづけたまへ

三塗の黒闇ひらくなり

中

大應供我歸命せよ

願以此功德

平等施一切

同發菩提心

往生安樂國

二 道光明朗超絶せり
清淨光佛とまうす
ひとたび光照かふるもの
中 業垢とのぞこれ解脱とう

慈光てるかふむらあ
ひうまれいるところに
法喜とうとぞのべたまふ
中 大安慰城歸命せよ

无明の闇を破るゆへ
智慧光佛とあつけたり
一切諸佛三乘衆
上とも不嘆譽たまへり

光明てらしたくぶんで
不斷光佛とたづけたり
聞光力のゆへなれば
上心不斷にて往生を

佛光測量ふきなし

難思光佛とぞなづけける

諸佛ハ往生嘆じて

下 弥陀の功徳と稱せむ

神光の離相とぞとうざれば

无稱光佛とぞなづけける

因光成佛のひろ哉

中 諸佛の嘆ずるところなり

光明月日勝過して
超日月光とかぶけり
釋迦牟尼世尊を
上 无等等と歸命せよ

弥陀初會の聖衆
算數のおよぶことなし
浄土を称ずるひとみな
下 廣大會に歸命せよ

安樂无量の大菩薩
一生補處に入るなり
普賢の德に歸してこそ
中 穢國ゆかずして化するれ

十方衆生のためにこそ
如來の法藏ありがてこそ
本願弘誓ゆ歸せしむる
中 大心海に歸命せよ

観音勢至も彼とも亦
慈光世界と照曜し
有縁我度してたゞちに
下 休息あることあるべけを

和廿八

安樂淨土にいるひと
五濁惡世かへりて
釋迦牟尼佛のごとくして
下 利益衆生へきものあり

神力自在なること
測量するべからざる
不思議の德とあらわす
上 无上尊 我歸命せよ

安樂聲聞菩薩衆
人天智慧かぎりなく
身相莊嚴みなおなじ
中 他方に順じて名とつね

顔容端政たぐひなし
精微妙軀非人天
虛无之身无極體

上
平等力と歸命せよ

和三十

安樂國に往ぐゑひと
正定聚にこそ住せるを
邪定不定聚くゑをし

上
諸佛讃嘆したまへり

十方諸有の衆生へ
阿弥陀至徳の御名をきく
にんじつしんいらいたゞ
真實信心いらいたゞ
おもふ所聞と慶喜せん

上

若不生者のちうひゑ
信樂まことにたのしう
一念慶喜するひとへ
往生かならずさだまる

中

安樂佛土の依正へ
法藏願力のなせるなり
天上天下にたぐひなし
中大心力帰命せよ

安樂國土の莊嚴へ
釋迦尤尋のみことにて
とくともつくしがたしと
上尤稱佛帰命せよ

已今當の往生々
この土の衆生のこゝろ
十方佛土よりきたる
上
无量无數不可計

阿弥陀佛の御名をきき
歡喜讃仰せしむまで
功德の寶城具足して
下
一念大利・無上なり

たとひ大千世界の
みてらん火ともとびゐきて
佛の御名称きくひとは
上 ゆゑゝ不退ならんなり

神力无極の阿弥陀へ
无量の諸佛をほめたまふ
東方恒沙の佛國より
中 无數の菩薩ゆきまふ

五十六億七千萬
弥勒菩薩へをしへ
まことの信心をうるひと
このゝひとをうとをもくべし

念佛往生の願による
等正覺にいたるひと
をもへちゝ弥勒おなじくて
大般涅槃をさとるべし

真實信心うるゆへに
そなはり定聚の入ぬるべ
補處の弥勒におなじくして
无上覺をさとるなり

像法のときの智人も
自力の諸教をさしおきて
時機相應の法あれば
念佛門にぞいりたもふ

弥陀の尊願とたのべ
信樂生ることにうるむとん
憶念の心は称ふして
佛恩報ずるおもひあり

五濁惡世の有情の
選釋本願信ずべ
不可稱不可説不可思議の
功徳ハ行者ハ身ふみてり

本師龍樹菩薩へ
智度十住毘婆娑等
に引
ゆくまておろく西とはめ
ゝ〻ゝ念仏せしめう

南天竺に比丘あらん
龍樹菩薩とぞ
有无の邪見を破ぶと
世尊へ稱てとゝまる

本師龍樹菩薩の
大乗无上の法をとき
觀喜地を證してそ
もろもろの念佛をめ

龍樹大士出ぶいでゝ
難行易行の道をしへ
流轉輪廻つゝれらをば
弘誓ぢからのせたまふ

本師龍樹菩薩の
おしへとたくきうんひと
本願心にうけしめて
他弥陀と稱ぞ

不退ぜくゐとみやこに
ろんゝおもうんひとゝる
恭敬の心に執持して
弥陀の名號称ぞ

●南无阿弥陀佛の廻向の
恩徳廣大不思議ホて
往相廻向乃利益にハ
還相廻向ホ廻入せり

往相廻向の大慈ハ
還相廻向ハ大悲ホり
如來乃廻向ホうり其
淨土の菩提いぞせん

弥陀観音大勢至

大願のふねに乗じて

生死はうみにうかべり

有情ぞよりてのせたり

弥陀大悲の誓願は

ふかく信じてうたがへば

称するものもへだてなく

南无阿弥陀佛ととなへば

他力は信心うるひと様へ
うやまひおきふとろこべ
とくとくもてこそ親友ぞと
教主世尊へうやまたまふ

如来大悲の恩徳へ
身は粉にしても報ずべし
師主知識乃恩徳も
骨をくだきても謝すべ

改悔文

そろくの雑行雑修自
力ぜゝ捨てとゝろて一心に
阿弥陀如来我等が今度
乃一大事の後生御たゝけ
候へとたゝけゝして候

たのむ一念乃うちに往生一定
御助け治定とぎんしてけく
乃称名ハ御恩報謝とぞんじ
まゝらぜいまゝ候おの御と
ゝ聴聞まゝしゝけ候を
御開山聖人御出世ぜ御恩

次第相兼の善知識乃ちさう
ざ尋御勧化御息あうゝゝゝ
候ゝのゝゝゝさざあとさる
る御おきて一期ばかざり
まうゝをゝうさべゝ候

末代无智の在家止住の男女たゝん
ともかゝゝゝうとひとすて阿弥陀
佛とゝなえたのまゝゝゝゝさゝゝに餘のさ
へあゝとうゝゝ一心一向に佛なとけまさ
まゝゝさん衆生なゝゝゝゝ罪業ハ深重ゝり
ともゝるゝゝす弥陀如来なとひまゝ

べしとまたち第十八の念佛往生の誓願
せよとありかくのごとく決定しておくこん
称ともさえてもいのちのあんぎりん
称名念佛をえらびのうおをかしく
それ八万の法藏をきわめふるも後世を

きわめざる人を愚者とおもひ一文不知の
尼入道をとりてをも後世成ぜる智者
とすべきにあらざるべし當流のこころはある
がちまよ仏くの聖教をよみりの成ぜり
たりといふとも一念の信心をいたしたる
ざる人はいかなる事ありとをもべしされば

聖人の御ことばなれば一切ぜ男女たゝん身へ
弥陀ぜ本願と信ずべしとおもうべくとおぼせさるこゝろ
ゆへ不いろなる女人ありとゝいてもたゝろくの
雑行をすて一念弥陀如来今度の
後生たすけたまへとふくたのゝ申さん

文四十七

人へ十人も百人もみるともゆ弥陀の報土
に往生をとげゝ事さゝくゝとぶひわたべ
うゝぐ屋りのちりあるかしくく
夫在家ぜ尼女房たゝん身へあるのゆう
も弥く一心一向ゆ阿弥陀佛とふくたのゝ

まつりて後生とけさせ人と申え
人とがなく御さすけあるべしとおりひ
とりてさしたるひの心もめくあるべき
これをもつて弥陀如来れ御ちうひの他力
本願と申次第りこのくをなを後生ハ
たすけんとのうまとしさありがたく

思つたぶ南无阿弥陀佛〳〵
とをとべたるのおりうあるうまく

抑男子も女人も罪のふかくもかく人
諸佛の悲願をたのまそもいまは時分ハ
末代惡世なれバ諸佛の御ちうにて申

かなへぐる時ありう是ふよりて阿弥陀如來
と申奉るハ諸佛ふこどれて十惡五逆の
罪人をとれてけんとうふ大願とおし
まし〳〵く阿弥陀佛と形り給へうれ
佛とふくたのそて一念御こすけ候へと申
さん衆生をとれすけずバ正覺るしと

ちうひまし給と弥陀るんだ我等ぐ極
樂に往生せんと更ようぐひふー此
ゆくよ一心一向よ阿弥陀如來たとけ給へ
とふく心ようぐひちく信じて我身の
罪のふる事とだうちたて佛よまうせ
はい〳〵せて一念の信心ぐまんとも

八十人八十人百人百人
浄土に往生したる事さらにうたがひ
なくこれをもつてわれらがおのおのの
うん心のわたくしとおもへ南无阿弥陀佛
くと時ともいへば所をもきらはず
念佛申べしこれをもつて佛恩報謝の

念佛と申すあるかくのごとく
信心獲得したる第十八の願とこころ
ありこの願とおもうるは南无阿弥陀佛
のこころとこころうるのゆへに南无と帰
命する一念なり發願廻向のこころ

あるべしとまことなるかな弥陀如来凡夫を
廻向したまへばなほさきのちりこれと大經に
は令諸衆生功德成就とときたまへり
无始以來はくるとつくる惡業煩惱とのこ
ころもなく願力不思議とのゝく消
滅するゆへに正定聚不退のゆへ

なり任運とあらはれて煩惱を斷ぜず
たゞ涅槃城にいたるこのこゝろをもて此義
は當流一途の耶談なり他流の人に
對してかくのごとく沙汰あるべきなり前のち
能〳〵ものしるべしなるべし

聖人一流の御勸化おりもきら信心成
りて本とせらるる候そのまゝたりきのく
雜行をなげすて一心に弥陀に歸命を
もつぱら不可思議の願力にまかせ佛のうち
往生は治定せしめたまへそのくゝわを
一念發起入正定之聚とも釋しそのうへに

文五十三

稱名念佛は如來のえらぶ往生とさだめたまひ
御恩報盡の念佛とこゝろうべきなり
あなかしこ〳〵

抑當流の他力信心はかくのごとく聽
聞して決定せしむる人こそあるべきその信心の

通とりて心底はおさめたく他宗他人な
對して沙汰をぐべきは路次大道また
くは在所にもちいつる人ともくうす
これと讃嘆をなさるべつて守護地頭方
にもたてまえ信心をえうといひて疎畧
の儀あるいよ〳〵公事をまゝ〳〵とべ又

諸神諸佛菩薩ぬもおろそかにすべ
からずみな南无阿弥陀佛の六字をもつて
おもまるゆゑなりこゝをかの主法をもつて
おもてとし内心に他力信心をふかくたくわへて
世間の仁義をもつて本とすべしこれを
いう當流とぞ申すなり抜のかりもに

ふてゝとゝろゝぐきうの形りゆえうしく

文明六年二月十七日書之

抑毎月両度乃寄合の由来ハおホの
なるでとゝいふさゝゝ他のことハあゝべ
自身ハ往生極樂乃信心獲得の

ゝゝえるるゝゆくあるゝ往古より
いまハいるゝまでも毎月の寄合と
いふことゝいゝくもことあるとゝく
ども さゝゝ信心の沙汰とゝかつて
もてこれ申ゝゝゝゝ近年いかゝゝも
寄合のゝゝゝゝ酒飯茶ハんと

たとうるそみなく、退散せざるべし
佛法は本意をもつぐうるぐうるぐる次第
あり いつまも不信心の面くに一段の不審
をもたて信心は有無を沙汰さるべ
きことなるべし所詮も退散せざる
条もうべかるべ おぼつかなくなんぞうぬるく

思案とりどりなることあり 所詮
自今已後よくよく不信心の面をまも
たぐひ信心は讃嘆わるべきと肝
要なり
そもそも當流の安心はともかくも
あるべきもの身は罪障のあるべ

とゝ〳〵ぐゝとゝ為ゝくの雑行のこゝろと
やゑて一心ゝ阿弥陀如来に帰命し
今度の一大事ゝ後生たすけゝまゝと
ふゝくたのゝん衆生をべゝくゝなゝけ
たまゝゝづゝゝさゝゝゝくゝゝびあるゝ
ゝゝゝかゝくゝゝゝくゝゝゝゝゝる人へ

まゝゝゝ百即白生あゝきゝゝゝこのゝゝ
ゝゝを毎月の寄合いゝゝゝも報恩
謝徳のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ真実の
信心と具足せゝゝる行者もあゝゝ
ゝゝりのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

明應七年二月廿五日書之

毎月両度講衆中へ

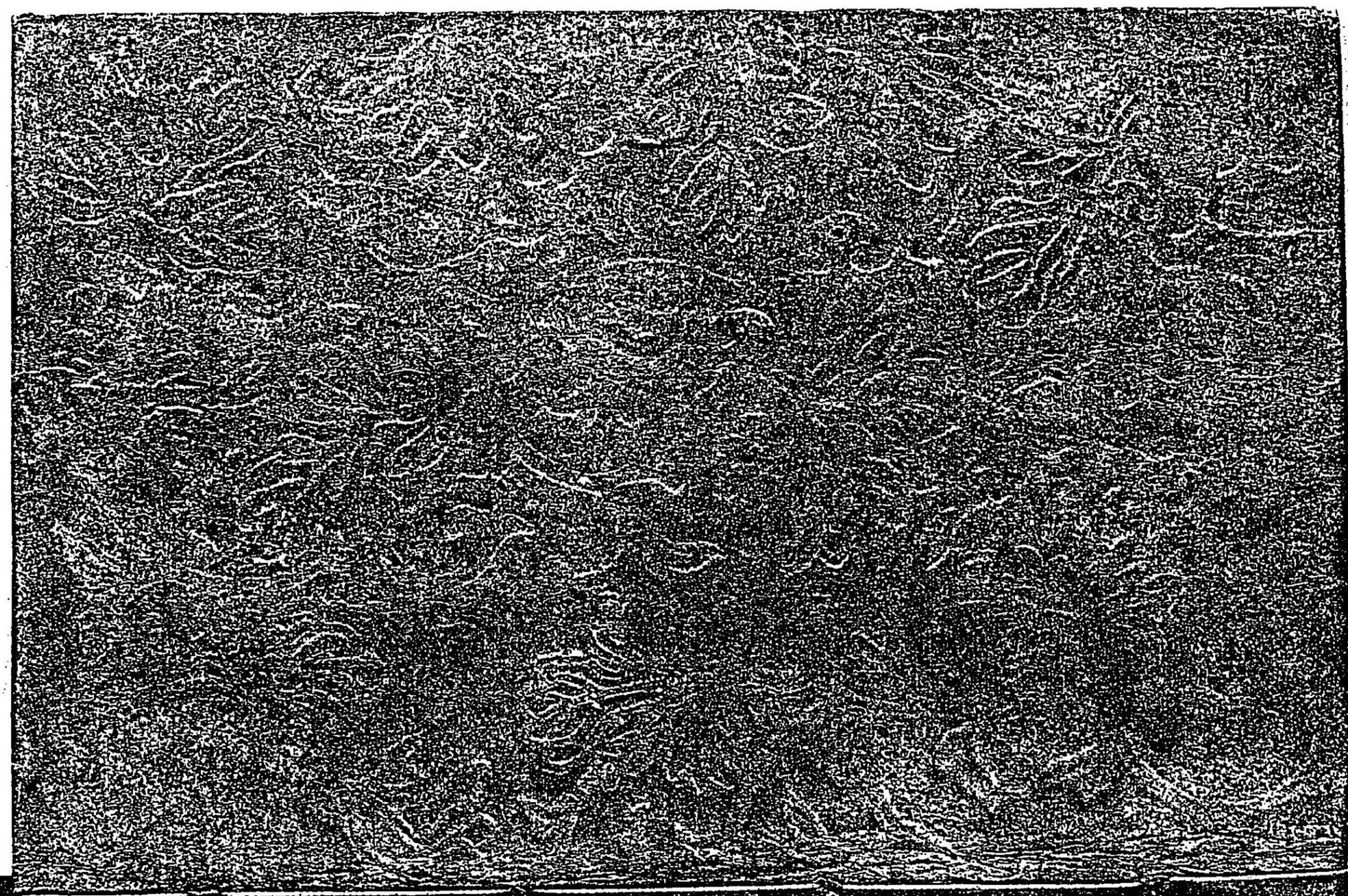
八十四歳

夫人間の浮生を相とゝく観ずるに
おのゝ〳〵あるいのこの世の始中終
夢幻泡のごとく一期をうけべきまぐ

万歳の人身なりけりゝ事ときゞ
一生さだやとしらまゝいとうて
にもゝ百年ゝ形躰とたのゝべき我や
さる人やさきけゝもちゝあるともも
ちゝ夜をこれさだめ人をこのべく
ちゝ露よりもちゝはゝしらうこれべ

朝こそ紅顔ありて夕べには白骨となる身なりとぞ思ふ無常の風きたりぬれば
ともなひぬるかのまつかぜ
もろかりいのちたえぬれば紅顔ひる
にして變じて桃李のよそほひ
はるかなれば六親眷屬あつまりてなげき

かなしむともなほその甲斐あるべからず
さてしもあるべき事かはとて野外
ふ送り夜半ばかりにおくりをはりぬ
れば白骨のみぞのこれるばかりなり
中陰のあかつきさきの人間のならひ
事に老少不定のさかひいまだしれざるの人命

くれぐ後生の一大事我心にかけて阿弥陀佛とふりたのみまいらせて念佛はうすべきなり此ぶみあるべしく

明治十九年三月廿九日翻刻御届
同　年四月十六日出版
定價金五錢
編輯出版人　石川縣平民　近八郎右衛門　金沢区横安江町百九番地
翻刻出版人　富山縣平民　大槁甚吾　新川郡富山西町十五番地